1.

Isseitachi no shinkatei

一世達の新家庭

New Homes for the Issei

In this pamphlet are thirteen short sketches about families who have left the relocation centers and found new homes and work. In all cases the heads of the family are Issei. The work which they are doing covers a wide range; they are living in nine different states -- in rural areas, small towns, and large cities. Each of the relocation centers is represented by at least one family. The sketches were prepared from material collected prior to December 1, 1944; changes may have been made by some of the people since that date. The following are the names of the heads of the families, in the order of their presentation:

Harumi Yamasaki	Tom Toyoji Yamane
Kenji Sumi	Hiyakuji Yanaga
Teiichi Andow	Rokuro Okubo
Shungo Shimomura	Toyone Maeda
Eishichiro George Koiwai	Joseph Sakamoto
Isao Tanaka	Chiura Obata
Tsunayoshi George Kaneda	

****

War Relocation Authority
Department of Interior
February 1945.

序言

先見の明ある第一世は其の子供達が通常の白人社會に於いて利用すべき良い機会があるのを、あまり長く奪はれて居るといふ事を望まない。轉住所内の環境は青年男女に良くないといふことを熟知して居る。そして彼等自身も亦通常の生活に導かれて居ないといふ事も氣付いて居る。だから彼等は適當な職業と生活の保證が與へられたならば、もっと愉快な處に移轉したいものだと望んで居る。然し轉住をする決心をするには勇氣を要し、之を遂行するには執拗(ねばり)と堪能である事を必要とし、之を完成させるにはかなりの困難な仕事も共なるものである事をも知って居る。然し乍ら時たま困難と辛(つら)い目にも出会ふものであるが、轉住の必要に迫まられた第一世の大部分は轉住の結果に於いて、みな充分に満足して居る。

此の小冊子の中には轉住せる數人の第一世及び其の家族の經驗を記載して居る。其の中のある者はかなりの困難にも出會ふて居るし、又或る者は満足な地位に到達する前には随分ひどい経驗を舐めて來た者もあるが、轉住した事を残念がって居る者は一人も居ない。轉住者は同じ様に自由な生活だとか、近所の白人の友達であるとか、又は隣り人の親切な事だとか、子供達が學校で具合良くやって居るとか又は平生の職業に従事して居るとか等に付いて語って居る。其の人々は轉住する何れの地方でも、日本人轉住者が何(なん)なりとも貢献する事に對して、白人社會は親切と援助とを與ふべく、喜んで轉住者を歡迎して、うけ容れる用意があるのだといふ事をも己に見出して居る。

此の小冊子の寫真に出て居る人々は何れも轉住に成功した人達であるが、他の人達で轉住せん事を望み、之を試みる者にも同様に成功する良い機會があるのである。

山崎家に在る三世に亘る第一世、第二世、第三世の撮影せるところである。
向って左より右へ。
後列に立って居るのはイーデス、ヂェームス、山崎霽見氏及びのぶ。前列は
より、清井政子と其の二週間半になる男の兒マイカル、清井パトリシャ及び山崎夫人。

遠方から來た人達

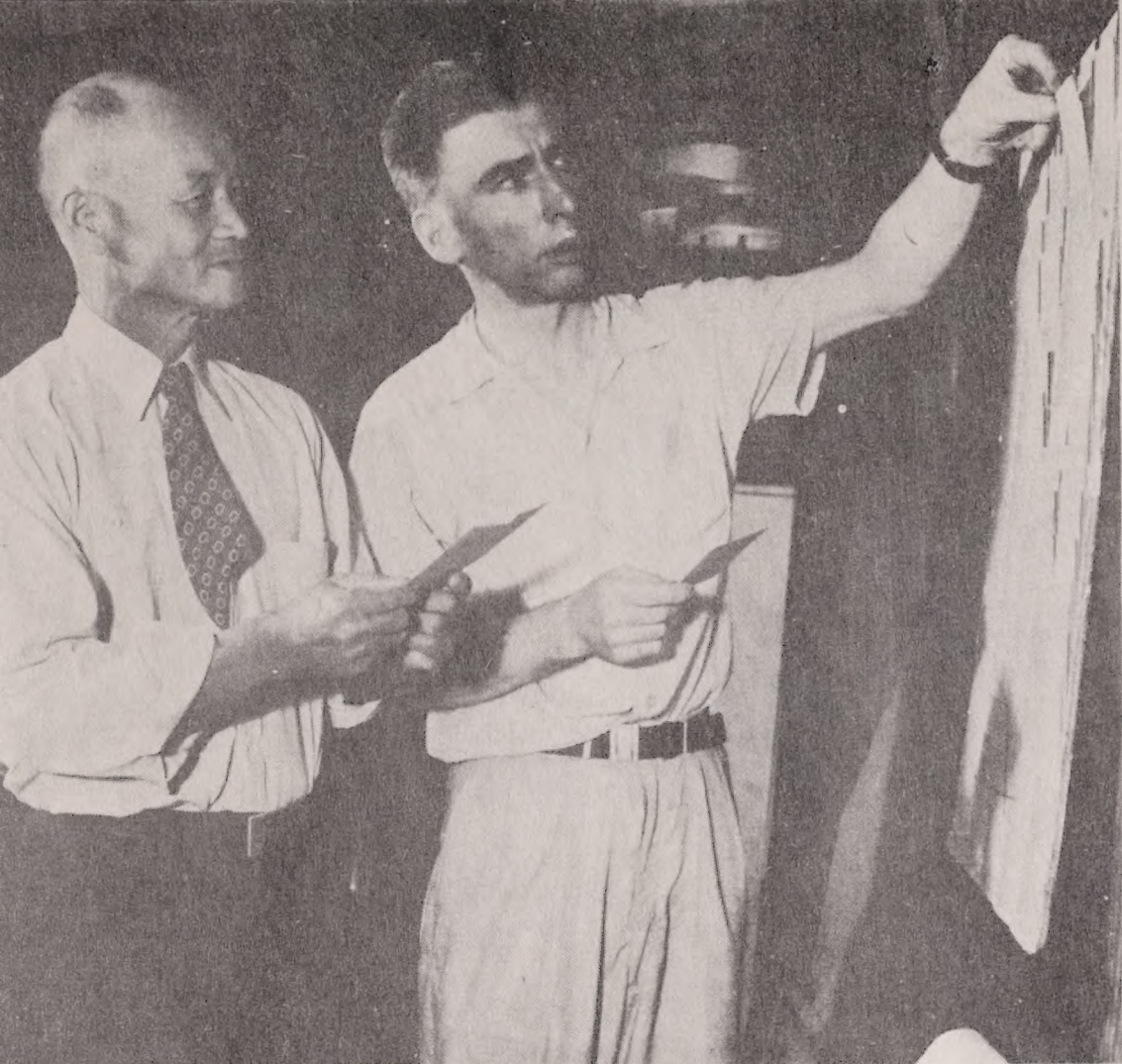
華府(ワシントン)より數哩北方のメリーランドの畠に、戰争前には加州モデスト近くの農園でやって居ったと同樣に、山崎震見(ハルミ)氏は再び野菜園を経營して居る。千九百四十四年の四月に山崎夫妻が一番末の娘イーデスを連れてアマチー轉住所からメリーランドへ轉住した時には、もう山崎家の家族は一人もセンターに殘って居る者は無かった。四人の娘達と一人の息子は親達が定住せんとして準備して居た處の近くのメリーランドに已に住んでゐた。今一人の息子は軍隊には入って居り、他の娘は清井(キヨイ)チョージ氏に結婚して、ニュージャージー州ブリッヂトンのシーブルック農園に傭はれて夫と同棲して居った。

山崎家族のうちで最初東部に定住したのは二十四才になる三枝(ミエ)であって千九百四十三年二月にメリーランド大學で卒業科目を経續せんとして來たのであった。處が六月には全大學の土壌分析研究所に奉職する事になった。殆ど到着した日から家族も茲に轉住させ度いものだと努力し始めた。すると間も無く二つ許り年下(した)ののぶが轉出して來て全大學の農政學課の書記として就職し一所に住む樣になった。又十九才になる、よりがバルチモアの看護婦養成學校に入學すべく出所して來たのも其の後間も無い事であった。十七歳になるエーダはワシントン郭外のチェビー、チェースの家庭に働きをすべく出て來た。十六歳になるチェームスはメリーランドのマリオッツビル高校に來て、通學して居るが自給すべく、みえの友人の農園にパートタイムの仕事を見付けた。そのうちにみえ及びのぶが両親の仕事口や住宅をみつけ出したので、最初みえが計畫した事は之で完成されたわけであった。

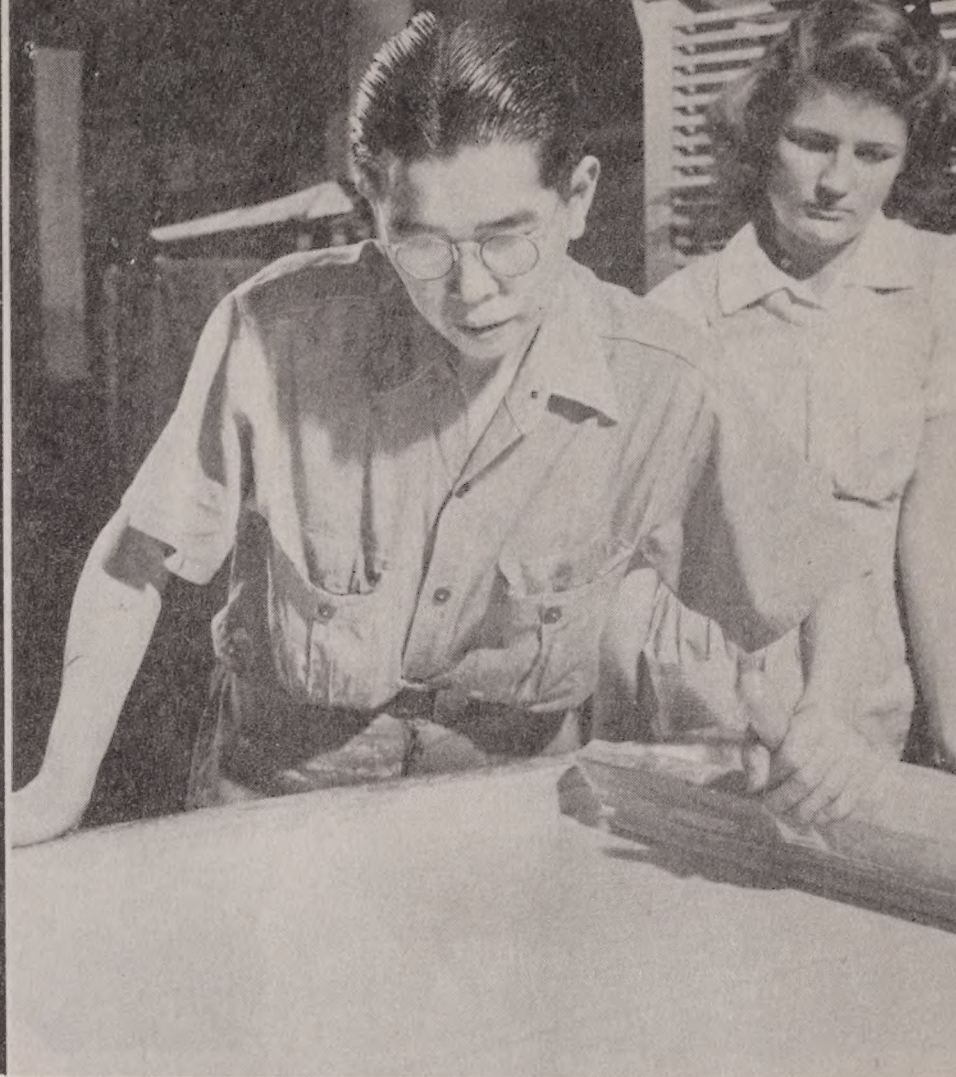
かくして山崎家の老夫妻も農園の所有主に依って提供されて居る氣持ちの良い家(丸太ゴヤ)に住んで居て、電氣や水や料理をするガス等も皆備へ付けられて居て、山崎夫人は主人のコックや掃除をして家計の收入を助ける事にして居る。チエームスとイーデスの二人の子供達は親達と共に住んで居て近所に在るハイスクールに通學して居る。

山崎家の者達が四月に越して來た時には、メリーランドでは春作の蒔付(まきつけ)けは少し遅(おそ)ったが、山崎氏は種を蒔く事が出來て、

向って右圖は山崎みえさんがメリーランド大學で土壌分瓣実驗室で試驗管を用ゐて研究して居る處。
左圖は山崎夫人がバーロン氏夫妻のお台所で御食事の仕度をして居るところ。又夫人は此の家庭の掃除もうけ持って居る。

二十英町許りの野菜物の收獲があった。だから千九百四十五年にはその二倍以上の土地を耕作してコーンや白いのや甘いポテトーや、トメート、アスパラガス其の他の行商收獲類を成長させやうとして居る。其の農園の面積は約九十英加（エーカー）許りあるが其の中の半分は雑木林である。
山崎夫妻は二人の子供と共に住んで居り、他の四人は日曜日や祭日等には訪問に來る事の出來る位の近くに居るから、少しも淋しい事はない。つい最近になって、娘のぶが小林ヂェームスに結婚したので娘聟（むすめむこ）も出來るやうになった。そのヂムはワシントンのトレールウエイといふガラーヂで働いて居るのである。少し離れたニュージャージー州のブリッヂト

上圖の右は山崎夫妻がメリーランド州のシーブルックでホームの庭先きに立って居る處。
左は山崎霽見氏がメリーランド州シーブルック農園で雇主なるエドワード、バーロン氏と次の日の仕事の計畫に付いて話し合って居る處である。

ンに山崎夫妻は結婚して居る他の娘まさ子と四才になるパトリシヤと、ベービーのマイカルとの二人の孫達を持って居る。唯軍隊には入って居るハロールドのみ此の家族の住んで居る地方から遠く離れて居るだけである。

彼等はメリーランドやワシントンで古くから住んで居る人や轉住してきた新しい友達を見付けた。異口同音に彼等は良い住む處を見つけたと語って居る。

右圖。角氏が新しい職業にメイスナー雜色工匠所で熱心に絹布の加工職工として働いて居る處—同所に働いて居る女工が觀みて居る。

左圖。角氏夫妻と大久保孃とはニューヨーク市で、新聞欄に廣告して其の返答に應じて探し出した家具附のアパートメントで靜かに宵を送って居る處。唯茲で自分物を使用して居るのは銀製食器と皿類だけである。

三人の二世達は紐育市民となる。。。

角健二氏と其の妻君の八千代夫人は以前には家庭働きをして居たがハート山轉住所からニューヨークへ轉住して以來、新らしい商賣を覺えた。一所に住んで居る角夫人の妹大久保じゆんさんも前には彼等と同様な仕事をして生活して居たが、今度はやはり同じ様に新らしい事をしやうとして居る。此の姉妹の両親はハト山轉住所に残って居るが娘達は近く親達を呼ばうと望んで居る。角氏は千九百二十年の六月に十五歳の時渡來したのであった。大久保姉妹は其の後三年あとに渡來した。彼等三人共皆桑港ハイスクールの卒業生である。そしてポモナ集合所からハート山轉住所へ行く前迄は白人の家庭に働いて居た。轉住所の中では角氏は家屋掛りの外勤部に勤めて居り、角夫人は食堂の給仕をし、

大久保嬢は轉住事務所に働いて居た。

一九百四十四年の三月に大久保嬢が先づさきにニューヨークに向って轉住した。そして直ちにイースタン共同消費卸し賣會社の書記として職を見付けた。其の后二ケ月にして姉さんと其の夫も轉住して來て一所になった。彼等は再びもとの家庭働きをする積りであったが、大久保嬢は何か新らしい仕事をする様にとすゝめたので六月上旬に紐育轉住支局の斡旋に依って、メースナー雜色工(カラー・クラフト)の絹布スクリーンの職工として仕事を見つけた。最初に仕事は骨が折れたがだん〴〵馴れて來て、今では大層すきになったと云って居る。

「私共が最初キャンプから出て來た時は、前にやって居た家庭働きの外には、何もした事が無いから、他の仕事を見つけるにはむづかしいと思って居りました。處が自分達のすきな仕事をみつけたのは本當にラッキーでした。私共の待遇も非常に良いから、私達は茲に留(とゞま)る事にしました」と語る。

紐育市には多くの異った人種と國民が居る。彼等の就職して居る會社でも株主はユデヤ人であり、働き仲間も二人はスペインの娘達です、一人はイタリヤの娘である。角(スミ)夫人の語る處によれば、いゝ贔屓(ひいき)はなくて各々此の仕事に馴れ具合に依って待遇をうける事になって居ると。角(スミ)家の人々が家庭働きを止めてしまった重なる理由は、角夫妻と大久保嬢が一所に住み度いといふ希望であったからである。然し住宅を見付けるのにはかなり骨が折れた。大久保嬢は暫時の間友達の處に寄寓を餘儀なくせられ、角夫妻は一日に一人で一弗づゝも拂ふルーミング・ハウスに滞在せねばならなかった。然し其の后間も無く新聞の廣告を見て之に答へてブロードウェーの上(かみ)の方に在る家具附のアパートメントを見つけた。其のアパートメントは二室と小さい料理室と風呂場があった。電氣、水、ガス代と一週間に一度づゝリンネル、敷布(シーツ)等を代へる約束で月八拾弗を拂って居る。大久保嬢が家を探して居るうちにも不愉快なめに会った事は一度もなかった。「茲の人々は大へん忙がしいので私共が他の人々とは違って居る事等には氣がつかない様です」といって居る。此の三人の一世達はホームでゆっくりしたり、見物に出かけたり、活動をみたり、友人を訪問したりして居る。

角(スミ)氏がいふには「私共は永久に紐育には住まうと思ひます。西部沿岸へ歸らうとは思ひません。茲は非常に良いから何で帰る必要がありませう。唯友達が居ないので淋しく思ふが、此の新しい環境に馴れ様と努力して居ます。最初はアパートを探すにも「日本人無用」等と云はれ随分心配して居たが、反對に厚遇されて居ます。自由に何處へも行き、他所(よそ)は知らないが、紐育では本當に厚遇されて居る事を経驗上から、キャンプの皆様に語りたい。」

安藤よし夫人及び貞市(ていち)氏がカネディカット州のストラトフォードの農園のポーチで「マイカル」と一處に居るところ。マイカルは安藤家の者達と立退き以前から共に居たが、今ではクルーガの犬「ダッチエス」と一緒になって畑の中を飛び廻って居る。

友情的な新英州

今一度きもち良く定住した安藤貞市(ていち)氏及び妻君のよし子夫人は種を蒔いたり收獲したり又は家畜を飼ったりして満足に暮して居る。彼等は近所に働いて居るのや或ひは勉強して居る四人の娘達の訪問するのを樂みにして居る。

彼等は加州のウィントン(中加)で果樹園を經營して居た。そして子供達の爲めに加州に於ける完全の敎育機關を利用する便宜を許った。三人の年長の娘達乃ち廿七歳になる京子(きやうこ)メーベル、二十六才になるミニー及び二十四才になるジューリヤは加州大學を卒業した。一人息子のエリックは千九百四十四年の七月に入營したが、スタンフォード大學の三年迄修業して居り、廿一歳になるソフィヤはモデスト初級(ジュニヤ)大學二ケ年を卒業して居る。

東部に於いて提供された良い機會は家族のすべての者に非常に魅惑的で

あったので立退に次いで暫時の間滞在して居たグラナダ轉住所を次々に一人〱で出所したのであった。メーベルは千九百四十三年の八月に出所して、ボストンに行きハーバード大學のファーロー植物學圖書館の書記として奉職し夜間にコープレー書記養生學部で勉強を續けた。

ソフィヤはネブラスカ州のウェスレーアン大學で勉強すべくセンターを出たが今はボストン大學に通學して居る。チューリヤは紐育市に出て石版印刷會社のタイピストとして就職した。ミニーはペンシルバニア州のブリストルに在るマニュミツト豫備學校で數學の教師として教鞭をとって居る。エリックは入營する以前にはオハイヨ州のクリーブランド市に居った。

両親達はメーベルと共なるべく九百四十四年のお正月にキャンプを出發した。そしてボストン郭外に在るウォーカー宜教師ホームに暫時滞在して居た。然し安藤氏の希望で田舎に出て自分の家を持ち度いといふので、カネディカット州のストラフトフォードでセオドル・クルーガー氏の農園で安藤氏は農事全般の仕事を支配する様に導かれたのであった。

安藤夫妻は畠で忙がしいし又時たま家族で揃ふ事が出來るので喜んで居る。最初の季節に於いて遠藤氏は立派なガーデンをつくり上げたし又良いジャージー幼牝牛（ハイファー）を飼ひ上げた。安藤氏が云ふには「シーズンの短いにも不係、農業狀態は西部沿岸とあまり大差はない」。安藤家の者達は新英州の人々が大へん好きになった。安藤氏が云ふには「茲の人々は大層友情に富み、交際場裏に於いても平等に扱ってくれる。西部沿岸では二世でも排斥に氣をくばって居たが、茲では始めて本当のデモクラシーを味って居ると大聲に叫んで居る。

安藤氏が自家用の野菜園で得意の仕事をして居る一刹那である。

左上の圖は下村梅夫人がニュージャージー州モーアス町で平岡ハリー君の支配して居る共同組合のグロッサリーで買ひ物をして居る處。下村家族はそこで三浦忠雄夫妻・森内平次郎夫妻と響君及び内田夫妻等の良い隣人を平岡家族の外に見出した。

上圖は若主人のリチー氏が下村氏の木から採って來た許りの梨子を氣を付けて選り分けるのを見て居る處。ニュージャーシー州リバートンの日當りの良い傾斜した島には養雞園の外に林檎、桃、梨子、櫻、及び甘櫻等五種類の果樹を栽培して居る。

下村アンとまり子さんは學校がすんでからリチー家のモーリーとバーニーさんと共に下村家の居間で人形遊びをして居る。時には犬や猫ともあそぶ。

下圖はリバートン町區の小學校八年生である下村デビッド(新君)が地理と歴史が一番好きで、此の繪では宿題の地圖を書いて居る時母さんが見て居る處。

ニュージャージ州の新しい家庭

東部へ定住した大家族の一つはポストンから轉住した下村俊吾(しゅんご)氏夫妻であらう。千九百四十四年八月五日に。ペンシルバニア州のフィヤデルフヰヤに八人の子供の中、五人を連れて、既に二月の頃スワッツモア附近に轉住して居た二人の娘達と共になるべく着いたのであった。四人の男子のうち長男は最近合衆國の軍人として出征した。

下村氏は千九百十三年に二十六才で、日本の商業學校を卒業した後に加州へ渡来した。そこで廿二年間果樹園や野菜畠を經營し、立退前六ケ月間は百二十英加の果樹園と養雞園とをやって居った。家族と共にポストンへ立退いた時には下村氏はブロックのガーデナーやヂャニターをして居た。

貴府(フィラデルフヰヤ)へ着いてから下村氏夫妻は一所に來た子供達五人と貴府ホステルに滞在して居るうち、下村氏は貴府轉住支局事務員の援助で仕事口を探してあるいた。處が貴府の南方十哩許りの處に在るニュージャージー州リバートンの日あたりの傾斜(なゝめ)した畠の持主であるエー、エル、リッチー氏の農園が見つかったので八月十六日にホステルを出て行った。リッチー氏は此の農園をば千九百〇六年から所有して居って、主なる産物は果(くだ)物と養雞である。リッチー氏の共同經營者は息子のジョシュア氏であってそこに妻君と二人の小さい娘達とで住んで居る。

下村氏は週給をもらって居て其の外に電氣装置あり、水道及び石炭でも、たゞでもらへる薪でも燃せる暖爐のある七つの室のある大きな家を與へられて居る。此の家族には自家用の野菜畑も與へられて居るが来年はもっと大きな畑を與へられべく希望して居る。

下村家の二人の娘さん達はスワッツモアに働いて居るが、一人は卅三才になるとしえさんであり他は十八才になる幸(サチ)さんである。彼等は白人の家庭に住んで居て両方共ルームと食を與へられて居り、幸さんはそこで働いて居る。としえさんは貴府の社会局サービス交換所でタイピストとして就職して居る。娘達は週末には両親をホームに訪問するのを樂みとして居る。

両親と共に居る五人の子供達は皆學校に通って居る。十六歳になるヨシヤと十四才のリンコルンはパルマイラ高校にバスで通学してゐる。校長が云ふには彼等の學業成績は極宜敷(よろし)いと。

十二才になるダビデはリバートン町區の小學校に通學して居て已に籠球（バスケットボール）の選手として名を博して居る。九つになる千惠子アンと、四つになるマリ子はリチー農園に殆ど隣接して居るリバートンに在るウェスト・フィールド・フレンド校へ、リチー家の子供達と一所に通學して居る。かくの如く子達達は、各々學校で学友から尊敬されて居り成績も亦交際に於いても少しも困難は無さそうである。

下村夫人と若い方のリチー夫人はとても良い友達になって居る。リチー夫人は下村夫人に英語を敎へ、妹に自家用の自動車で町に買ひ物に一所に行く時等はよく敎へてくれる。其の代りに下村夫人はリチー夫人の家庭の仕事を手傳って居る。

リバートンに轉住すると間もなく下村夫妻は長老敎会の牧師さんに招かれて、以前サリナスで屬して居た様に同派（プレスビタリアン）の敎会の會員となった。（長老敎会）

リチー氏は此の新しい雇ひ人及び其のする仕事には大いに満足して居るし、下村氏の家族も亦玆に居るのを喜んで居る。下村氏の言に依れば、「私はニュージャージーに居るのが大層嬉しい。それは私の家族も私も本當に自由で、又子供達の爲めにも良い學校があります。そして私共も此の農園で具合よくやって居ります。子供達も玆が好きで多くの友達が出來ました。私達は玆に永住し度い。氣候も大層宜しい。日本の様な氣候だと感じます。果物も野菜類も草木も丁度日本の様に繁ります。果物が此の畠で成熟するのに私は興味を持って居ります」と。

左下圖はち惠子（アンニー）下村さんがウエスト.フォールドのフレンド協会學校の三.四年の敎室で同案の三年生と共に圖書館の本を見て居るところ。

下村ジョシア及びリンコルン両君はパルマイラ高校のバンドで蹴球試合の時の爲めにけいこをして居る。ジョシアはラッパをリンコルンは笛を吹いて居る處。

小祝家の立派な家具付の家で招宴を開いて居る處。左から右にかけて、小祝カール君一等兵、其の嫁さんの以前には玉木千代子さん。小祝夫妻・ピーター、ケンモア二等兵（カール君の學友）と、費府ステッツン病院在勤の和田ドクター、以前にはボストン、センターの醫師であった。
座って居るのはワシントンから訪問に來た千代子の姉さんの玉木ゲーイさんである。

ペンシルヴァニア州のデャーマンタウンの街路樹のある處に

小祝。。。榮七郎（デョージ）氏夫妻と二人の息子達はペンシルヴァニア州のデャーマンタウンの並木路の大通りのわきにある氣持ちの良い家に定住し、小祝氏はもとの職業であるクリーニング業にかへり、二人の子供達は學業にいそしんで居て、彼等のホームは已に一世や二世の人々の社交の中心となって居る。此の樣な生活ぶりは千九百四十四年の四月の頃に両親達がミニドカセンターから轉住して來て以來の事である。

立退き以前にはワシントン州シャトル市に住んで居て、そこで廿四歳になる鑿（カール）一等兵と、廿二才になるヘンリー俊行（トシユキ）君が生れたのであった。小祝氏はクリーニングの洗濯工場（プラント）の所有者であった。ミニドカに居った時、小祝氏は倉

庫掛りをして居て、カールは實驗室の技術員、ヘンリーは暫らくタイムキーパーをして居た。カールはシャトルに居った時はワシントン大學で醫科の前科(プリメディック)を勉強して居た。彼は千九百四十三年の六月にフィラデルフィヤのハーネマン醫科大學及び附屬病院で勉學する爲、ミネドカより最初に出かけた。病院では彼を陸軍特別養成課(A.S.T.P.)に編入せしめた。ヘンリーはデンバー大學で一年勉強して、後に費府で兄と一所になる。〈千九百四十三年の八月に出所した。彼は今ではフィヤデルフィヤのテンプル大學で商科を專攻して居るが餘暇にはアメリカン・フレンド協會の本部で働いて居る。

兩親達が子供達と一所になってから小祝氏はクリーニング所に就職した。小祝夫人も近所に在る食料品箱詰(パッキング)會社で箱詰め及び紙帖りの仕事を見つけた。夫人は時間の都合の良い時だけ出勤して働いて居るが通常の仕事時間は午前八時から午後四時迄となって居る。

小祝家族は住宅を見つけるのに特別な頓智を使はねばならなかった。最初は新聞の廣告に答へて見たが、彼等に具合の悪いのや又は家主で日本人に借し度く無い者等もあった。だから最後には彼等自身の方から借家を求むと求廣欄へ廣告して見た處が數人のアンサーがあったので其の中の一人の白人の婦人の家を借りる事になった。そして其の家の一階と三階を家具無しで月六十弗で借りる事となり、家主が二階に住んで、ポーチと庭園は家主と借家人と共同で使用する事になった。彼等の瓦斯代、水代、電氣代等は一ヶ月七弗位であって、食費は一週間約十五弗である。前に食べつけて居た日本食も充分に食べられるし、お米一俵でも、醬油でも亦食べつけて居た魚類でも買ふのにさふ困難ではない。

去る九月に小祝家では息子のカール君が、以前にツールレーキ及びセントルイスから來た玉木千代子さんと華燭の典を擧げたといふお芽出度い事があった。其の結婚式は、ペンシルバニア州の美以(メソヂスト)教會で擧行せられ、その擧式は再轉住者の友として盡力して居られるイー・ダブリュー・チェー・シューミット牧師に依って掌(つかさ)どられたのであった。

序言

先見の明ある第一世は其の子供達が通常の白人社會に於いて利用すべき良い機会があるのを、あまり長く奪はれて居るといふ事を望まない。轉住所内の環境は青年男女に良くなつといふことを熟知して居る。そして彼等自身も亦通常の生活に導かれて居ないといふ事も氣付いて居る。だから彼等は適當な職業と生活の保證が與へられたならば、もっと愉快な處に移轉したいものだと望んで居る。然し轉住をする決心をするには勇氣を要し、之を遂行するには執拗(ねばり)と堪能である事を必要とし。之を完成させるにはかなりの困難な仕事も共なるものである事をも知って居る。然し乍ら時たま困難と辛(つら)い目にも出会ふものであるが、轉住の必要に迫まられた第一世の大部分は轉住の結果に於いて、みな充分に満足して居る。

此の小冊子の中には轉住せる數人の第一世及び其の家族の經驗を記載して居る。其の中のある者はかなりの困難にも出會ふて居るし、又或る者は満足な地位に到達する前には随分ひどい經驗を舐めて來た者もあるが、轉住した事を残念がって居る者は一人も居ない。轉住者は同じ様に自由な生活だとか、近所の白人の友達であるとか、又は隣り人の親切な事だとか、子供達が學校で具合良くやって居るとか又は平生の職業に従事して居るとか等に付いて語って居る。其の人々は轉住する何れの地方でも、日本人轉住者が何(なん)なりとも貢献する事に對して、白人社會は親切と援助とを與ふべく、喜んで轉住者を歡迎してうけ容れる用意があるのだといふ事をも已に見出して居る。

此の小冊子の寫眞に出て居る人々は何れも轉住に成功した人達であるが、他の人達で轉住せん事を望み、之を試みる者にも同様に成功する良い機會があるのである。

山崎家に在る三世に亘る第一世、第二世、第三世の撮影せるところである。
向って左より右へ。
後列に立って居るのはイーデス、ヂェームス、山崎靄見氏及びのぶ。前列は
ユリ、清井設子と其の二週間半になる男の兒マイカル、清井パトリシヤ及び山崎夫人。

來たのであった。

彼等はオークランドに定住して居った。そのうちに戰爭となり、立退きとなったのでトーパーズ轉住所に移り、田中牧師はそこで新教聯盟教會の指導者となり妻君も同教會の音樂部で大いに活動した。餘暇には又聲樂を教へて居った。信君は學校へ通ふのと、養豚場で働くのとで時間を分けて居た。

轉住所を出たのは家族のうちで信が最初であった。千九百四十三年の十月にニュージャージー州のペンニントン豫備校へ入學すべく出所した。翌年の正月には彼の両親もセンターを出てシカゴに行き、田中牧師はメソヂスト書類会社に働く筈であったが、着いて見たら其の職は已にふさがって居た。だから家族でシカゴから費府に行きフレンド協会のホステルに滞在中をこの教会聯盟に奉職すべくつとめた。

然し適當の職が得られなかったので田中夫妻はニュージャージー州のプリンストンで家庭働きもしてみたが、其の交渉も面白く行かなかったので、紐育に行ってホテルでキッチェンの手傳ひをした事もあった。處が過去五ヶ月の不安の生活を了へて十月十二日に此のマウント・サイナイ病院に就職する事となった。

ニュージャージー州のペンニントンの豫備校で信君は生物學、物理及びラテン語科で優等の成績を擧げて居る。父君の田中氏が云ふのには「信はあの學校が大層すきで、そこではみんながとても良くしてくれます。良い友達を學友や先生達の間でたくさんつくりました」と。「二年のニューヨークの病院に來て百名の間で も働くといふことは、彼にとりまして大切な經驗でありまして、彼は將來醫師にならうとしてやって居るのであります」と語る。

然し田中牧師夫妻は之を出世の經歷とせんとするので無くて、前途に良い道の開けるのを計畫して待って居るうち、生活の保證と愉快な仕事に從事してのである。「最初の數ヶ月の困難。後に、今は具合良くやって居ります」と云って居る。

神経學実験室で働く田中信君の仕事は精密な注意力と集注力とを要するのである。

大家族と忙しい働き振りをみる ○○○

加州のスタクトンで大いに活動し有用な存在であった金田(カネダ)綱良(ジョージ)氏夫妻と七人の子供のうち六人とは、急遽立退いたが、再び生活の糸口を東部に見出して、熱心に各々其の目的に到着せんと努力して居る。両親と其の数人の子供達は費府に住んで居るし、他の子供達は休暇を利用して時折此のホームを訪問して居る。七人の子供が須市(スタクトン)に生れ、そこで大きくなり或る者は大學や初級大学にも通学する様に発展して来た。金田氏はある人の家庭働きをして生計を樹て、又彼は「日傭ひ仕事組(デーイ・エンプロイメント)」の主人をして居った。金田氏の家族は其の白人の傭ひ主が證明書に書いてある様に「此の町で相當に認められた存在」であって、個人的にも、家族的にも一般から尊敬をうけて居った。立退後はローワ轉住所内で金田氏はコックの仕事を見付けた。そのうちに子供達は白人社会の渦巻の中へ突進せんと計畫した。千九百四十三年の始め二十歳になるきよ子(ケーイ)はバーヂニヤ州リッチモンドに在る長老教会の専習學校へ入学せんとして出所した。其の後間も無く長男の後雄(十五)もマサチューセッツ州のボストンに在る新英州音樂學校へ勉学の為め出て行った。次に出たのは十七才になるベンで費府へ行った。彼はテンプル大学で勉強する心算であったが夜学部に登録せねばならなかったので最初は小児科病院の實驗室の手傳いを日中して見たが後に工場に変った。又廿四才になるグレースもベンと一所にバージニア州リッチモンドの南浸禮(バプテスト)教

フヰラデルフィアのフレンドシップの家の四階を造作してアパートメントの應接間に住んで居る金田家の一部の者達。左から右に―金田夫人、ルービー、ケーイとベン。

會外國傳道會社の編輯部書記として出所した。
貴府に着いてから、ベンは親達も出て来る様にすゝめた。グレースも貴府で、チャーマンタウンの家族相談所（ファミリー・ソサエテー）支部の書記として就職し、ベンと協力して轉住所から両親を呼び出さうとした。かくして親達と二人の若い子供達、明子（ルービー・メリワン）（十四才）と享（ローイ・サトル）（十七才）も千九百四十四年の四月に貴府に着いた。金田氏が貴府のホイッテヤ、ホテルで副料理人頭（セコンド・シェフ）として仕事を見付けたのは其の後間もない事であった。處が其の住宅の手配はむしろ新奇（ノーヴェル）なものであって金田家族はフレンド協会に依って経営されて居た各國人の活動に用ゐられて居た「社交室」の四階を借り受け、其の代りに一、二、三階の床を掃除するといふ條件であった。此の四階は物置であったが金田家族はこゝを別けて住宅のアパートとして造り代へた。だから月の支拂ひは電氣、ガス、水、代等六弗位のもので、他の費用は食費として今の處四人暮しで一週廿弗と見做して居り、米や醤油等暮む日本食も通常一日に一度づゝ食して居る。夏になった時子供達が両親を訪問に來た。俊雄はボストンの化粧品製造所に働いてもうけた金を使って來た。ケーイも來た。米國フレンド協會の奉仕委員会の文官人事（シビル・パーソネル）課に勤めて居た。又一番若い高校生であるローイも兄ベンと同じ工場で働いた。サニオのデヨージは貴府でトラックドライバーをして居たが去る七月軍隊に入營した。ルービーとグレースは夏季キャンプに行って居たので不在であった。
スタクトンで金田家族は赤十字の仕事や教会や團体事業に盡力して居た。貴府に來ても他の今の爲めに盡して居て、殊に轉住者には親切で金田夫人は時々其の人達をお茶によんで居る。子供達はタイオガ浸禮教會に通って居る。金田家族は満足に暮して居て、轉住するなら、フィラデルフィアへ御出でなさいと招いて居る。

左圖は金田氏が貴府のホテルで、セカンド・シェフとして就職し、他のヘルパーが見て居る處。彼は上手なコックらしい。

家の廻りを圍んで居る大きな果樹園の中で、お父さんが林檎をもぐのを手傳って居るのは山根まさ子、まり子、みち子の三人の娘である。長男の篤は此の時はボーイスカウト隊の集会に出席して居ったので不在であった。

上圖は友情深い隣り人。東海林夫人と(左)池夫人(右)とベビー達が道の向ひがはの友であるローロフ夫人(中央)、と其の小さい娘を訪問してゐる。

下圖は相互に援助し合ふ、コーン畑に働く善き隣り人どうしの劇的場面である。轉住者の隣り人がトラックをドライブすると強力な切り倒し機が青きコーンを切り倒す。すると東海林ヂョージに依って運轉されるワゴンをトラクターが引く。池ヂョージがコーンを車におろす。

茲はミゾーリー州のウエブスター・グローブの新しい住宅の居間で
小園（前加州大學）教授及び其の家族が居るところである。
床上に座って居るのはギヤウ君で、カウチの上に居るのはシニヤ
高校に通學して居るリリーさんと小園夫人並びに小園教授
である。

子供達も近所で新らしい友達を見つけた。長男の篤(アツシ)も近くに在るアーデンのボーイ・スカウト隊の仲間へ入隊し、アーデンの市営水泳場で妹達に水泳(ミヅオヨギ)を教へて居る。三人の年上の子供達は、そこの公立學校の九年生と、六年生と三年生とに分けられて通學して居る。

轉住した事と仕事の経驗に付いて山根氏は左の如く語って居る。「私の仕事は最初は骨が折れましたが、私のラインですから大層面白いと思ってやって居ります。私は茲で充分やって行けると確信して居ります。私共は轉住しやうと思ってセンターを出たのですから、假令(タトヘ)私共の全部の問題が思ふ樣に解決されたわけでは無くとも、今日迄相當にやって來たのですから喜んで居ります。私は直ぐに住宅と良い給料の仕事が見付ったから幸(ラツキー)でした。茲らは親切な人がたくさん居ますから戰爭後は自分で店を開かうと思って居ます。子供達も茲が大層好きになって來ましたし、殊に茲の食物はキャンプよりもずっと子供達に宜敷いのですから」と微笑した。

米國西海岸で十年間もプロデュース業に経驗をもって居ったといふ事は、今回山根氏をして、デラウェヤ州のウィルミントンの共同消費組合で野菜部の支配人として愛嬌良く〱顧客に對應せしめて居る。

上圖之寫真は立退き以前に加州に於いて撮影したものであるが、彌永家族の十三人の者がカンザスシティーにて再び一所になった。
左から右にかけて、立って居るのは 畑中伊平、々まつえ夫人、弥永ハリー、古河夫人、古河ポール。
座って居るのは、畑中マリエ、弥永静子、弥永きりえ母堂が畑中あき子さんを抱いて居る。弥永百治氏が畑中とみえさんをかゝへて居り、次は南地ふみ夫人と弥永ハリエット。

カンザス市にて再會(レユニオン)

彌永百治氏夫妻と家族

カンザス市にては去る十月弥永(ヤナガ)夫妻と子供達や娘聟(ムスメムコ)及び孫達十一人の再會で大した賑はひであった。彼等はポストン轉住所から、カンザス市は大層住み良い處であるから、皆で出て來て一所になるが、良いとすゝめ合って、一時に二三人づゝで出所したのであった。

彌永家の十三人の家族の者達は、ポストン轉住所で一所に住んで居たが、以前には彌永氏は加州のガーデナで農業に従事して居り、娘聟達は其の家族と共にインディオから來たのであった。第三番目の息子であるハリーが最初にセンターをネブラスカ州に行くべく出たのであった。然し最初にカンザス市へ行くつもりで出たのは廿二才になる文(フミ)さんと二十才になる靜子(シヅコ)とであって千九百四十三年の五月に到着したのであった。

彼等は直ちに市内で家庭働きの仕事の口を見付けて。愛嬌があり且利口であるといふので接する總ての人々に好かれるやうになった。此の町の人々が大層友情的であるといふ事を家族の者に通信してやったので、姉のメーイさんと其の一世の夫である古賀ポールも一所になる樣にすゝめた。すると古賀夫妻も日ならずして出所して來て、直ちに市内の冷藏庫に、就職する事になった。

かくして千九百四十四年の初春の頃、古賀及び彌永姉妹の両家の者達は、彼等の両親達も一所になる方が良いと氣付く樣になった。するとハリーもネブラスカから一旦ポストンへ歸って、両親と一番末の妹、十六歳になるハリエットをつれてカンザス、シティーへ自動車でやって來た。そのうちに家族で近所隣りの良い區域に、二家族住(デュプレックス)宅を購入した。そしてそこに住んで居た借家人が立退く迄の三ヶ月間彌永両親は、郊外のお屋敷で少しの家庭の雜用をしてルームとボードを得、其の外に少しの收入を得た。其の後加州に置いてあった家具類が倉庫から着いたので彌永家族は氣持ち良く新しいホームに落ち付いた。

古賀夫妻は市内の他の住宅地に在るアパートメントに住む事になった。そのうちに長女の松江さんと其の二世の夫である畑中伊平さんと、九才になるすみえさん(マリー)、五才になるとみえさん(メーイ)、四才になるあき子さん(アリス)達三人の娘の子も、姉妹達の書いてやつ

つた良い働き口と、子供達を教育する良い機會があるのを真面目に利用して他の家族の者と一所になった。かくして十三人の家族は再び茲で一所になったのである。そのうちに畑中、家族も松江夫人の両親の手に入れた二家族住宅に住むべく一所になった。

最初靜子は家庭働きとして働き始めたが今では、土木器械會社の簿記掛り及び書記として就職して居る。去る夏の頃に、ワイオミング州のフォート、ワレン兵營に駐屯して居た南地伍長に結婚した文さんは今ではそこの良い家庭に働いて居る。両方共古賀氏も畑中氏も一世であるが軍事用製紙工場に就職して居る。又良く熟練した腕きゝの裁縫師である古賀夫人は、あるお屋しきに時間を指定して、お裁縫をしてやって個人的に仕事をして居る。其の外にハリーは、ディゼル、メカニック（機械工）として、全米に知られて居るトラクター會社に良い地位を得て就職して居る。一番若い娘のハリエットは大層人氣のある、三年生として東南區ハイスクールに通學して居り、二人の大きい方の孫娘達はグランマー、スクールに通って居る。

畑中夫人が云ふには「子供達の通學して居る小學校でオープン、ハウス（父兄招待会）のあった時に、私に示された親切と懇篤なる歡待にはほとほと驚き且喜びました」と、此の大きな友情に富む町の何處へ行っても家族全体の者に與へられる歡待ぶりを云ひ表はして居る。彼等は教会でも多くの友人をつくり、此の町の氣分がよいから戰後も茲に落ち付くつもりである」と。

下圖は彌永百治氏夫妻が新しい住宅の前に立って居る處である。彌永氏は八十歳近くになり夫人は六十歳近くである。

彌永家の新しい住宅はミヅーリ州カンザス市のスウオープ、パーク街に在る。そこは市内の一番大きい立派な公園近くに在る。

大久保家族の全部の者達は、八歳になるバージニアの
外は今イリノイス州パラタイン近くの農園のホームに於いて
ゆっくり讀書するのを樂みにして居る。バージニアは學校
に行って居るところである。
お母さんは二つになるフィリスと四歳になるジョシュアンを
助けて居る處。

イリノイス州の農園にて

嬉しさうな顔、丈夫さうな體（カラダ）、きもちの良さうな家庭及び生産的な事業等とふ言葉は、現在の大久保六郎氏と其の家族に摘要されるのである。彼と妻の綾（アヤ）子及び三人の娘達はイリノイス州パラタイン近くの農家に住んで居るが大久保氏はシカゴのある専門家の所有する百二十英町の農園を耕作して居る。彼等は千九百四十四年の四月の頃にグラナダ轉住所より出所して來た許りである。小さいが完全に現代式のきれいに造られた家が其の住宅である。

地主の美しくされた土地の向ひ側の景色の良い處にあって、眼うつりの良いホームは二才になるフヰリスと四才になるジョアンとには、わけても良いところである。家の中に寒い日や雨天の時に遊べる遊び部屋があり、庭園の中には水泳池（プール）もある。八歳になるバージニヤは聖（セント）ピーター、ルーテル學校で、日本人の第二世を見た事の無い多くの子供達の間に於いて、た易くたくさんの學友をつくったので先生達を驚かしてしまった。

大久保氏の最初の季節物として植え付けたものはコーン（玉蜀黍）及びソーイ、ビーンズ（大豆）であった。彼の農業の經驗は太平洋岸の西北部地方で父のやって居った農園で、六歳の時渡米して以來習ったものであるが、其の時以来彼のアメリカ生活は始まったのであった。かくして大久保氏の立退き以前の十年間といふものは、加州のローサンヂェルス市で野菜物のマーケットを經營して居たのであった。

大久保夫人は新らしいホームにうつって來るや否や、食卓用の野菜物を植え付けたものだから、已に數週間後には、もう早野菜物を店から買って來る必要（ヒツヨウ）は無くなって來た。乃ち前栽物（セザイモノ）で充分する様になって來た。大久保夫人は又野菜物や果樹類の罐詰を百クワーウト（over 100 quarts）以上もしたが、尚ほ五十クワーウト以上もつくる様に豫期して居る。

大久保家族の者は茲に永住するかどうかはわからないが、少くとも現在のところでは子供達が非常に良い環境のもとにすくすくと大きくなって行きつゝあるのを知って、大久保夫妻は大いに喜んで居るところである。

轉住して來て良かったと茲に來た事を大久保夫妻は落ち付いて語って居る。子供達の爲めに本當に良いのであると。

上圖。大久保バージニヤは毎日バスで學校に通って居るが、イリノイス洲アーリントンハイツのセント・ピーター・ルーテル学校の庭で遊んで居る。先生達は彼の女が聰明な事と、おち付いて居る事によって多くの友達をつくった事を語って居る。

下圖。大久保さんがトラクターをとめて、シカゴ方面の轉住局事務員であるW.W.レッシング(キャメラに背を向けて居る)氏にコーンの收獲の豫想に付いて話して居るところ。

右上圖は大久保夫人が此の季節に罐詰めにした果物や野菜類の百ヶある中の一部である。あるヂャーは畑から大久保さんがつんで來た葡萄からとった野生のグレープ、チェリーである。

右下圖。二才になるフィリスと四才になるジョーアンがお父さんの雇はれて居る農園のきれいになった草地の上で楽しく遊んで居る處である。

前田氏夫妻が自分達で経營して居る氣持ちの良いボーデン・ハウスのステップの處で止宿して居る若い數人の二世達と一所に寫眞にうつって居る處。左から沙原敬・谷口晃・船窪リリアンと前田夫妻。

執拗なる事は成功のもとゐ

轉住計畫に二度も不滿に終った経驗に直面し乍らも、尚ほ之に成功せんとして努力した前田豊根(トヨネ)氏及び妻君のすすえさんは、二人の子供のうち一人を連れて、シカゴに轉住し今では現在の取りきめた手配に大いに幸福に暮して居る。前田氏はマンザナー轉住所へ立退く以前にはプェエナパークで養豚業を経營して居た。千九百四十三年の初春の頃家族こぞってユタ州の農園に出所したのであった。處が之には滿足出來なかったので、東部の方に良い機会があると友人から聞かされて、前田氏は單独で千九百四十四年の四月にシカゴへ行った。そこで大きなホテルに傭はれて家族を呼び寄せる決心をした。そこで農園で使用すべく購入したトラックで前田夫人と十八才になるサムと十六才のジミーが運轉して東部に來て一所になった。

シカゴに來てから家族に充分住宅を探すのに骨を折った。前田氏も仕事をして居たし、夫人もドレス店の裁縫師として就職したが、シカゴ市の南方に十室のある家を見つけて、之をリースして他の轉住者の爲めにボーデン・ハウスを開いたので仕事を止めた。然し十人や十二人位の人を止めたとて充分の收入が無いので、收入を補ふ爲めに彼のトラックで轉住人の荷物を運び始めた。すると運びきれない程あるオーダーがあると彼は言って居る。目下ジミーだけが兩親と一所に居って學校へ通って居り、長男のサムはペ州の養雞鑑別所へ最近入舍した。前田家では充分收入ある独立事業に喜んで居るが、不日中西部か又は西部で豚飼ひを始めると。

下圖は前田夫妻が一日の仕事ををへてホームの安樂椅子に腰を下して環境に興じてゐる。

前田氏が微笑しつゝ轉住者の家族の引越し荷物を運ぶべく自分のトラックをスタートして居る處である。

キャベーヂの收獲を誇って居るところ。五十英町のキャベーヂ畠の收獲の一部を左から右へ…東海林ヂョージ、坂本ジョーセフ及び池ヂョージが調べて居る。

三ヶ族が共に働いて居る

坂本ヂョーセフ氏と其の家族は加州のサリナス農園からローワ轉住所を経てウイスカンシレン州の南部エルクホーン近くの農園に移轉して来た。彼等は此の新しい處が大変好きだ。ウイスカンシレン州の此の農園の「主旨(キーノート)」は「家族と近隣者達との協力」といふ事である。

坂本氏と其の妻君のひさ夫人と十八才になるヂョージ、十五才になるローイと十二才のサーリー達は百二十英加(エーカー)許りある農園の住宅に住んで居る。長男のヂョーは軍隊には入って居る。長女のクララは池ヂョージに結婚し、此の若夫婦も農園の手傳ひに来て居る。處が池ヂョージの妹であるアリスも、其の夫である東海林(ショージ)ヂョージと共に来て第三の家族として、完全に寄り合ひ所帯を持つことになった。

此れ等の若夫婦達は両親がウイスカンシレン州に到着してから両方共小さいベービーが生れたので農園の第二住宅に住まう事になった。

此の親戚どほしの三家族はエルクホーンの町から六哩許り離れた處にあるヴーン・レープ氏の所有になる百二十英町のランチで共同して收獲契約をして居る。そして千九百四十四年の春の頃到着した此の新しい農夫達は全部で九十五英加許りの蒔付け(まきつけ)をした。其の内訳(うちわけ)はキャベージを五十五英加程、コーンを十五英加、ポテートー、ねぎ及び人参を各々十英加づゝ植えたのであった。

レープ氏が言ふのには、新しくきた定住達が土地を耕作する具合や收獲契約の取り決め方に付いて、大いに満足して居るむねを語って居る。

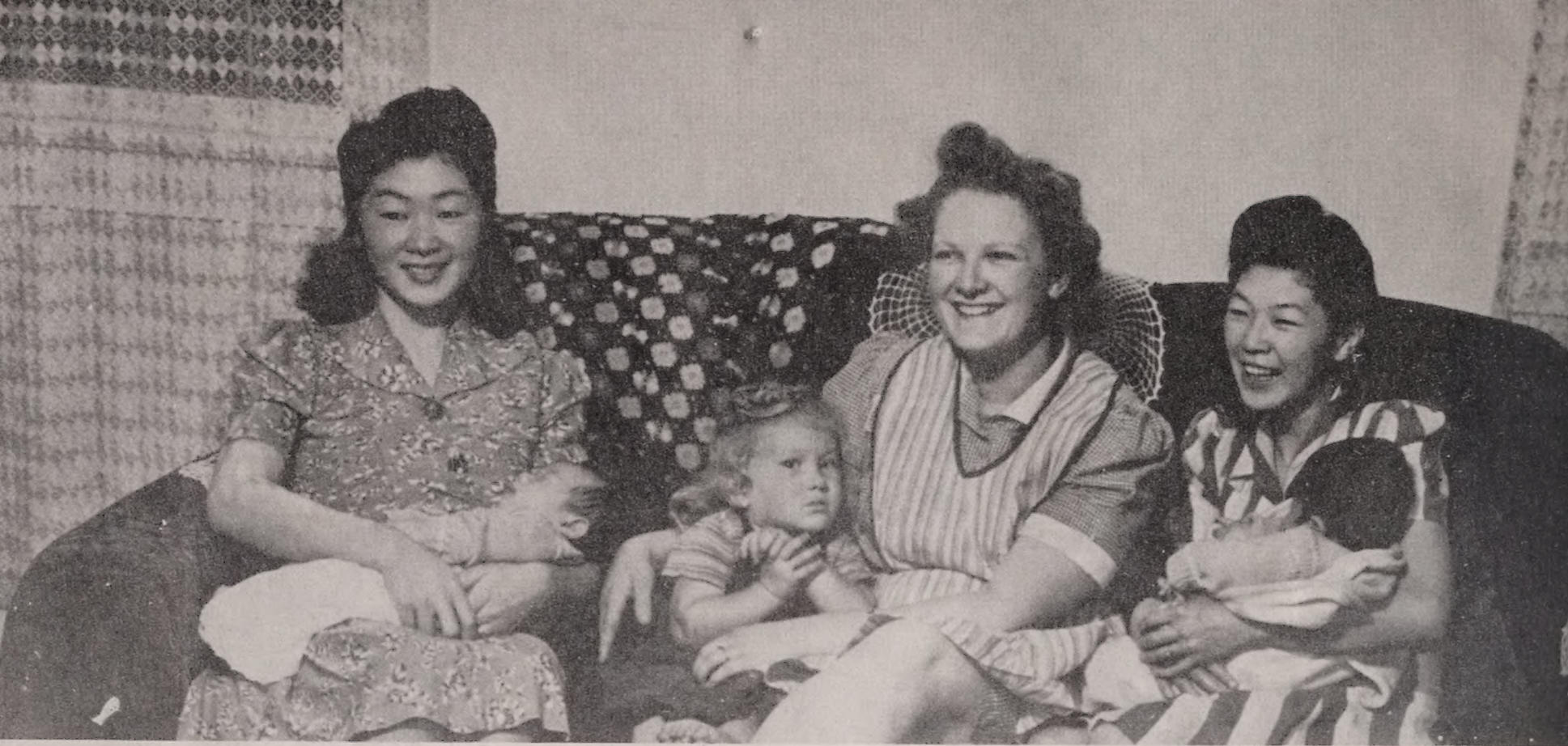
其のパートナーの長老である坂本氏は農園には充分なる経験のある人であり又東海林ヂョージは加州フレズノ附近で葡萄畠(ブドーバタケ)と梛畠(ワタバタケ)とを持って居たのであるが、池ヂョージは立退き以前にはクリーニング業をして居たのであった。

かくして日本人子弟の百姓達と、彼等の新しい隣り人通しの間には非常に良い友情関係が結ばれたので深くレープ氏を感激せしめ、又農家の隣り人との間に相互に農事の手を借し合ふといふ事が成立したので、此の地方に住み始めた坂本氏も深い印象に打たれたわけであった。

坂本ヂョージ氏が道の向ふ側の隣り人をヘルプして、ブラワー式に依るモロコシ切り機械でグリーン・コーンを穀室に入れて居る處。

坂本氏と二人の共同勞働者も勞銀を拂はないで他の農家を共同で助け合ふ事に依って、一番農事繁忙の時でも、よその勞働者を雇って給料を拂はないですむ様になった。だから道向ふの農家の夫妻が言ふには「それ以上の良い隣り人に來てもらへ無いでせう」と。

若い者達は仕事に協力する許りでなく其の地方のスポーツ乃ち野球のゲームにも協力した。十八歳になる坂本ヂョージは彼の高校チームで第二壘手として活躍して居たし、東海林ヂョージは中央ウイスカンシン野球聯盟團の南方組エルクホーン・ビヂネス軍の捕手として地方新聞は彼の特色を盛んに描寫したものだ。

共同收獲契約を試みた最初の季節に於いて地主も共同家族達も百姓として新來者は大成功であったとお互に感じて居る。そして其の地方にどしどし染まりつゝある様になって來たとの事である。

上圖は友情深い隣り人。東海林夫人と(左)池夫人(右)とベビー達が道の向ひがはの友であるローロフ夫人(中央)と其の小さい娘を訪問してゐる。

下圖は相互に援助し合ふ、コーン畑に働く善き隣り人どうしの劇的場面である。轉住者の隣り人がトラックをドライブすると強力な切り倒し機が青きコーンを切り倒す。すると東海林ヂョージに依って運轉されるワゴンをトラクターが引く。池ヂョージがコーンを車におろす。

茲はミゾーリー州のウエブスター・グローブの新しい住宅の居間で
小園(前加州大學)教授及び其の家族が居るところである。
床上に座って居るのは ギャウ君で、カウチの上に居るのはシニヤ
高校に通學して居る リリーさんと小園夫人並びに小園教授
である。

バークレーよりの大學教授

加州のバークレーに在る加州大學の教授仲間や學生達の間で大層尊敬されて居た小園千浦教授及び其の家族は千九百四十三年の春の頃からミゾーリ州のセント・ルイスに移轉して住んで居るが、そこでも美術家や學者達の間に於って尊敬と親交とを得つゝあり。然しこれは偶然のことでは無い。其の性格と奮鬪努力、並びに其の才能とが相俟って良い地位を得させたのであるが、それが又社會に適所を得させつゝあり。

小園教授の次男息子の「曉」さんは聖ルイスに残りの家族を呼び寄せるのに大きな力となったわけである。立退き前に曉君はある加州大學教授の援助でワシントン大學の建築科へ通學すべく準備されて居た。そこで曉はぢきに多くの親友をつくり、聖ルイスが好きになったので家族の者達がユター州のトーパッヅ轉住所に立退しや否や、そこに轉出すべく計畫を樹てたのであった。

かくして千九百四十三年の六月教授自身で茲に來て、二週間もたゝないうちに良い職と住宅が見付った。其の仕事はグリム、ランバック造花會社の美術家として就職することになり、住宅もミゾーリ州のウェブスター・グローブスの中に在る氣持ちの良い充分大きいのであった。すると直ぐに小園夫人と一番若い娘さんのリリーも轉住して來て一所になり、長男の君雄及び其の嫁さんのまさ夫人も皆來たので家族の者達の再會といふ事になった。

美術家であるキム君(君樵も お父さんと同じ様に、同じ會社で就職する事になった。そのうちに同会社に就職して居る古參の事務員と第一世及び第二世の美術師達はお互に好き合ふ様になって非常に折合ひが宜敷い。

其の會社の美術課長であるハリー・テーラー氏の言に依れば「小園教授は會社の幹部のうちで優秀な美術家であります」と。

キム君の妻君も亦直きに仕事を見つけて、最初はチェファーソン大學の書記として奉職し、それからガールスカウトの登錄掛りとして勤務した。リリーさんはウェブスター高校が大層好きであるが來年はワシントン大學に入學すべく心組んで居る。だが大學の建築科の社交クラブの會長に選ばれて盛んに活動して居る兄さんと競争する爲には、一入の奮闘努力をして其の名譽を得ねばなるまい。

上圖は小園教授の息子の嫁さんである君雄夫人はガールスカウトの同僚と共に寫って居る處。小園夫人は皆の者にすかれて登錄掛り員として適任者であると認められて居る。
下圖はグリム、ランバック造花會社の美術家達である。戰後の繪画に付いて語り合って居る處。
左側はヂェームス、ラッセル氏で画師、次は教授の長男である小園君雄で右側は小園教授で要点を教へて居る處。

小園家の家族の者達は將來も多分セントルイスに居るであらうと考へて居る。なぜならば子供達も大層此の町を好んで居り小園教授も亦他の雇はれ人や社長から非常にすかれて居るのであるから。然し小園師は目下加州大學の休職教授となって居る故に又不日復職を要求されるかも知れない。此の家族の哲學的思想としては小園夫人の語られる通りに「若し何人でも米國式の生活樣式に從ってアメリカに住まうとする人は轉住をして、他の人達の間に多くの友人をつくり、もっと幸福な將來をきづし樣に試みねばなりますまい」と。本當に其の通りではないだらうか。